

若かりし頃は気にもしなかった桜の開花情報、近頃は気になるところか待ち遠しくなってきた。近隣の見頃の桜を貪欲に探し回るさもしさも恥ずかしい。残された健康寿命で何回花見ができるだろうか、数えてみると、おやおや、恥じてばかりいられない。花見をしたい欲求は年を重ねたからか、だとすればそんな老境も満更でもないなあ。

桜餅を包む葉は早咲きの白っぽい花の**大島桜**、大阪造幣局は通り抜ける**八重桜**、沖縄本島は1月には開花する濃いピンクの**寒緋桜**だ。ここでは内地とは逆に本島北部から桜前線が南下してくる。大島桜と寒緋桜の交配種は**河津桜**、河津川沿いでは20数年前は背丈2M 足らずだったが今や倍近く？になり露店も目当ての「花より団子客」も押し寄せる。桜は菜の花が彩を添え1カ月は咲いている。各地各様余りに種類が多そうなのでググってみると一説には桜の原種は11種、交配種は100種以上あるそうだ。



懐メロを聴くとその頃の時代を思い出すのと似て、花見の季節になると北国の桜が思い出される。単身赴任地では自分時間はたっぷりある。地元の方から「おらがご当地桜」の情報をもらい花見に度々行ったものだ。

5月の連休、春風を受け喘ぎながら琴似から自転車を漕ぐこと1時間余、札幌郊外「真駒内公園」の**蝦夷山桜**はやけにピンクが濃い。木蓮も桜と競って大粒の蕾がはち切れている。暗く長い冬を越した道産子は陽射しに飢えている。快晴の豊平川や琴似川の河原では花より麦酒とジンギスカンで盛り上がり、単身者には羨ましかった。

5月の連休前、飲食業の方も買い出しに来る八戸港の日曜朝市、日の出前から露店が百軒以上並び。夕食の鮮魚や総菜を買いチャリでは辛い高台の「千本桜公園？」に寄ってみた。朝市の喧騒はなく早朝だからか花見客が見当たらない。分け入ると静まり返った桜の林は怖いぐらいひっそりとして、冥界に引き込まれそうだった。

「弘前城公園」は夜桜見物だ。熱燗を片手にそぞろ歩き始めたが、寒さでいつの間にか早足になり酒のまわりがいやに遅い。ここの枝垂れの古木は風格がある。「桜切る馬鹿」と言われるがリンゴの剪定技術を応用し桜の寿命を延ばしているそうだ。当方も剪定してもらおうか。白壁と朱色の橋、濠に桜は、千鳥ヶ淵同様ライトアップに映える。津軽の学生グループが広場にブルーシートを広げ酒盛りをしている。寒さでヤケになったのか大きな歌声が曲輪に響いていた。

岩手県「小岩井農場一本桜」、心優しい南部の牧童が夏の陽射しに喘ぐ牛の為に、明治後期エドヒガンを植え日陰をプレゼントしたそうだ。なるほど柵の向こう小高い丘に、広々とした緑陰ができそうな満開の大樹が一本佇んでいた。木陰で慈しまれた牛たちが排出した「返礼品」のお陰か？凜とした古木はかくしゃくとしている。背後に長く連なる秀峰岩手山と一本桜はお似合いと聞いたが、春霞なのか岩手富士は望めなかった。

「秋田角館」、ここは武家屋敷通りに咲く枝垂れ桜が有名だ。今にも脇差を帯びた侍が門から現れそうだ。伊豆大室山山麓や各地にその子が移植されているとか。出張ついでに立ち寄ること事3回、訪れた日は何れも咲き始めか葉桜だった。武家屋敷を桜が彩る頃にいつか再訪してみたいものだ。

福島県三春町「三春滝ザクラ」、樹齢千年と言われる紅枝垂れ桜は、百年前天然記念物に指定され町興しの重責を担わされている（観桜料300円）。大樹の枝を支えている数本の添木は松葉杖のようで痛々しい。ひねもす千年の来し方を語ってもらいたいが大勢の花見客相手に忙しそうだ。余生を静かに送ってもらいたい気もする。因みに町名の由来は桜、桃、梅が一斉に咲くからとか。急坂を休み休みしばらく登ると三春城本丸跡に辿り着いた。城下町を見下ろすと辻々の桜が点描のようだった。

千年の 何を語るや 滝ザクラ

雪解けが進み山肌のホルスタイン模様が消える頃長い冬が終わる。花々が咲き始め、これまでの白黒世界から色彩豊かな世界に移り変わる。

北国では春の先駆けの桜と芽吹きで膨らんだ淡緑の山々が、律儀に春の訪れを知らせてくれる。



真駒内公園



小岩井農場一本桜



河津桜



三春滝サクラ